

東医大誌 60(1): 1-2, 2002

巻 頭 言

小泉政権の寿命を占う

政治評論家

内 田 健 三



戦後日本の歴代総理大臣は、56年間に27人。平均在任わずかに2年という短期政権の連続である。長期在任は、佐藤栄作=7年8ヶ月、吉田茂=7年2ヶ月、中曽根康弘=5年、池田勇人=4年4ヶ月の順となる。政治ジャーナリスト半世紀におよぶ私の採点による番付三傑は、と聞かれたら、即座にナンバーワンは吉田さん、次いで、池田さんと佐藤さんと答えるだろう。続いて、中曽根さんと田中角栄さんというところか。

中曽根さんはなお現役で健在だし、田中さんはいわば功罪ともに“政治の天才”と評すべき人物だから、二人とも格別扱いとしておこう。

老ジャーナリストの繰り言は、年とともに、一国の宰相が小粒になるという嘆きである。特に、中曽根さん退陣(1987年秋)以降は、わずか14年間に11人の首相が去来するという惨状である。一般国民は、一国の最高指導者の名前を記憶する余裕さえないと言うのは言い過ぎだろうか。

それでも、この14年間の11人の宰相のなかで、異彩を放つ人物が2人いる。前なる細川護熙(1993年)と後なる小泉純一郎(2001年)である。細川さんは、1955年の保守合同以降、38年間政権の座にあった自民党支配を打破して、非自民政権を創り出した人物である。一方の小泉さんは、いわば自民党の内部革命方式で総裁予備選挙によるトップの座をかちとった人物といえる。小泉首相登場直後に、私が『前なる細川、後なる小泉』という表現で、両者の対比を試みたのは、その革命児的類似性に注目したためだった。

両者の共通点はまだある。第一に、政権発足当初の支持率の高さ。歴代政権のなかで、60%以上の高率を記録したのは、全盛期の吉田ワンマンと、就任直後の田中角さんの2人だけ。細川さんが、長い自民党支配を打倒して登場した時には、70%以上の高率だったから、私は“空前絶後”の支持率だと形容した。しかし8年後の2001年4月に発足した小泉政権は、なんと80%以上の高率を記録し、8ヶ月経過したいまなお、80%前後をキープしている。これこそ空前絶後かもしれない。

第二の共通点は、細川さんも小泉さんも、直観力にすぐれた、いわば“コンピューター”とでも称すべき政治資質の持主だという点である。ともに時代と国民の要請、願望、期待に適確に答える能力を持ち、卓抜、簡潔な表現で民心にアピールしてきた。しかし裏返すとそうした特質は、重厚な理論構成に欠け、独善、独走に陥りかねない弱点をはらんでいる。

支持率70%台で出発した細川政権は、わずか8ヶ月の短命でその幕を閉じた。それを上回る80%維持を続けて、小泉政権は新2002年を迎えた。ここまで書いてきたら、1月末に至って大変動が起こった。小泉首相がコンビを組んできた田中眞紀子外相のクビを斬った途端、内閣支持率が30%急落し、50%を割ってしまったのである。まさに、“政界一寸先はヤミ”。春4月でやっと丸一年の小泉政権が、果たして歴代政権の平均寿命二年間にたどりつけるかどうか。

内田健三先生ご略歴

政治評論家

1953年 東京大学法学部政治学科卒業

1982～92年 NHK 解説委員

1989～97年 大学審議会委員など。

1991～98年 東海大学教授，現在，(社)新構想研究会理事長，新しい日本をつくる国民会議(21世紀臨調)会長代理

著書：「戦後日本の保守政治」(岩波新書)，「現代日本の保守政治」(同)，「日本政治は甦るか—同時進行分析—」(NHK出版) など多数